

「スタッフ大切に」過労死防止

大津でシンポ 職場改善事例を紹介

厚生労働省は二十九日、過労死問題を考え、防止を促すシンポジウムを、大津市におの浜のピアザ淡海で開いた。甲賀市土山町の特別養護老人ホーム「エーデル土山」の広岡隆之施設長(四七)が、職場環境を改善した事例を紹介した。

かつて離職率が年40%を超え、など「ブラック企業」だった施設が、職員が辞める要因となっていた残業や腰痛、メンタル不調をゼロにしようと挑戦。朝礼や会議を簡素化し、福祉器具の導入で人力作業を減らした。個人面談を毎月実施するなどし、現在では採用を待つ人がいるという。

広岡施設長は「スタッフを日本で一番大切にしたい。労働人口が減少するこれからの時代は、サービスの質とスタッフの労働負担、業務量のバランスを取っていくことが、今以上に

求められる」と主張した。

二〇一〇年に福井市の会社で勤めていた男性社員が、当時(二七)が、上司の暴言のパワハラが原因で自殺した事件などを担当した海道宏実弁護士も講演。パワハラを苦にした自殺で長女(当時三〇)を失った「名古屋

屋過労死を考える家族の会」代表の伊佐間佳子さん(五七)が「家族で楽しく過ごした日々は戻ってこない。パワハラは殺人と同じ」などと訴えた。

シンポには、経営者や人事・労務担当者ら八十人が出席。一四年に施行された法律に基づく過労死等防止啓発月間(十一月)の取り組みで全国で開いている。

(堀尾法道)



シンポジウムで事例報告をするエーデル土山の広岡施設長＝大津市におの浜のピアザ淡海で